

医療の届かないところに医療を届ける

# JAPAN HEART NEWS



冬  
2021

- 01:カンボジア 命の最後の砦 現地の人たちと共に
- 02:ミャンマー 医療と教育の空白を埋める
- 03:ラオス 悩みや迷いを乗り越え、いざ活動再開へ
- 04:国際緊急救援事業(iER) ジャパンハートにしか出来ないこと
- 05:SmileSmilePROJECT



## 01 カンボジア 命の最後の砦

### 吉岡秀人 たった一人の渡航



2021年の7月から8月にかけて、ジャパンハート最高顧問の吉岡秀人はたった一人でカンボジアに渡航しました。多くの専門的な治療を担って来た医療チームが新型コロナウイルス感染症に伴う水際対策によって渡航を断念する中、どうしても必要な手術や治療を行うための渡航です。吉岡秀人がジャパンハートこども医療センターに滞在できる期間はわずか。できる限り多くの命を救うため、手術の回数も平時に比べて大幅に増えます。同時に、感染対策も入念に行う必要があります。現地の看護師への講習や、必要な資材の調達など、多くの準備が必要となりました。そのおかげもあって、吉岡秀人の滞在中には10人の子どもが手術を受けることができました。

患者の一人、ソリカちゃんは、1年以上前に血尿がきっかけで地元の病院を訪れたところ、膀胱腫瘍と診断され、当院にやってきました。

ソリカちゃんには小さな弟がいるため、両親の代わりにおばあちゃんが病院に付き添っていました。入院してから1年間は抗がん剤での治療を行い、腫瘍が小さくなつたため、7月に吉岡秀人が手術を行いました。

彼女は今回の手術で膀胱を全摘出したため、これからは膀胱の代わりとなる使い捨てのパウチを毎日付け替える必要があります。退院後もきちんと付け替えを続けていくためには、家族のサポートが不可欠。そこで、入院に付き添っていたおばあちゃんに使い方を説明し、しっかり理解してもらいました。退院前にもう一度、今度は尿がパウチから漏れないようにするための手術を行い、10月に無事に退院することができました。

実家が遠く、入院中は大好きなお母さんやお父さん、弟となかなか会うことができなかったソリカちゃん。退院してようやく家族と再会し、最高の笑顔をみせてくれました。

エナちゃんは、父、母、3人のお兄ちゃんやお姉ちゃんと一緒に暮らす2歳の女の子です。当院に来る1ヵ月前、国内最大の小児病院で肝芽腫（肝臓にできる子ども特有のがん）と診断されたのですが、この国には健康保険制度がないために高額な治療費のめどが立たずにいました。

ひどい発熱が続いたため、当院にやってきた彼女は、3月から抗がん剤治療で状態を落ち着かせ、7月に手術を行いました。吉岡秀人が滞在した1ヵ月の間に3回もの手術を受けたエナちゃん。手術は患者さんの体にとって大きな負担ですから、短期間でこんなに頻繁に手術を受ける例はそうそうありません。それでもエナちゃんは3度の手術を乗り越え、その後無事に退院することができました。

先日、再発や異常がないかの定期検査でも特に異常なし。一度は治療をあきらめたエナちゃんは、順調に回復しています。



吉岡秀人の滞在中には、他にも多くの子どもたちが手術を受け、元気な姿を取り戻しています。とはいえ、手術さえ済んだら治療は終わりというわけではありません。退院後も定期検査などを通じて、子どもたちの未来を確実に健康なものにすべく、ジャパンハートこども医療センターは今日も扉を開きます。



## 現地の人たちと共に 献血ドナー登録キャンペーン

カンボジアのジャパンハートこども医療センターでは、多くの小児がん患者さんの手術を行っています。がんの手術にはたいていの場合、輸血が必要となります。カンボジアでは輸血の供給が不十分なため、手術に必要な輸血は私たち自身で準備しなければなりません。とはいえ、輸血ドナーは簡単に見つかるものではなく、逆に血液需要は増加する一方です。加えて新型コロナウイルス感染症の拡大は、血液不足に拍車をかけました。

外部との接触が制限される中、不足を補うために、スタッフが献血をすることがあります。それだけで解決はできません。

そこで始めたのが、「Japan Heart Blood Donation friends」です。

献血に協力してくれる方をまとめたこのリスト。患者さんへの輸血が必要になった際には、リストの中から血液型が適合する方に呼びかけて、都度献血をお願いしています。リストに登録された方は、現在300名程度。多くの現地の方々のご協力によって、子どもたちの命を救うための手術が実現しています。



## ご支援は隣国タイの企業からも

カンボジアの隣国タイは、東南アジアでも医療水準が高く、カンボジアの人たちは必要になったときに、隣国タイで治療してもらうことがしばしばあります。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大によって国境を越えることが難しくなり、カンボジアの人たちは国内で治療を受けられる病院を探さなければならなくなりました。

この状況を重く見たタイから、ジャパンハートにご支援が届きました。在カンボジア・タイ大使館からはベッド10台、カンボジアで活動する複数のタイ企業も、さまざまな物資を提供してくれたのです。

6月にはタイ大使館で寄贈式典が開催され、現地のメディアにもとり上げられました。タイのパンヤラック大使は、「カンボジアの子どもたちに無償で専門的な治療を提供しているジャパンハートこども医療センターに協力し、質の高い医療サービスを維持するために必要な援助を行うことにしました」と、私たちの日頃からの活動を評価してくれました。

その後も、タイの企業から追加での支援が届くなど、ジャパンハートのカンボジアでの活動を支援する輪はより広がっています。今後も、各国の支援者の皆様とのつながりを大切にしながら、小児がんの子どもたちの治療や、カンボジア人スタッフの育成などに取り組んでまいります。



在カンボジア・タイ大使館での寄贈式典にて、パンヤラック大使（左から2人目）と  
ジャパンハートこども医療センターの神白麻衣子院長（右から2人目）、ジャパンハートの佐藤抄事務局長（右端）

## 02 ミャンマー 医療と教育の空白を埋める

### 10ヶ月目のミャンマー

2021年2月に起こった政変から、10ヶ月が経ちました。ミャンマー現代史における大事件発生から今に至るまでの嵐のような日々に思いを巡らせると、「もう10ヶ月」と「まだ10ヶ月」という2つの感情が立ち昇ります。

全土で巻き起こった抗議活動、それに付随して発生した経済崩壊と医療崩壊、教育の停止—やまない弾圧と反軍武力闘争によって、ミャンマー社会が混沌の渦へと落ちたこの10ヶ月間。いまも光明は見えず、一寸先を見通すことすらできない状態です。

日々可視化されていくのは、ひたすら暗い現実ばかりです。最近では、各地での凄惨な武力衝突だけでなく、国民経済の損耗によって、社会生活は大きな悪影響を受けています。

外資系企業の撤退や業務停止が相次ぎ、雇用環境が悪化。大勢の人が職を失いました。そこに、現地通貨の下落とインフレによる物価上昇が重なっています。ガソリンや食料品を含む輸入品の価格が急上昇し、市内飲食店でも目を疑うような料金改定がなされています。医療事情にも改善の兆しは見えません。新型コロナウイルス感染症をめぐる状況は落ち着きを見せているものの、ミャンマーの医療機関の大半を占める公立病院では医療者のストライキが今なお続き、国全体の機能は大幅に低下したままです。



### 「最後の自由」を行使して

このような状況だからこそ、ミャンマー事業部は立ち止まりません。医療事業では、休むことなく外来診療を続け、提携病院での外科手術も変わらずに行っています。銃撃戦や爆破事件に巻き込まれるといったリスクを抱えながら、最大限の注意を払いつつ、医療過疎地域への出張診療も継続中です。

終わりの見えない公的医療機関の機能不全が続く中、経済的に豊かとは言えない多くのミャンマ一人にとっての医療の拠り所は非常に限られています。この状況で、たとえ細くとも、決して切れる事のない「糸」としての役割を果たすことが、私たちのミッションである「医療の届かないところに医療を届ける」こと。その思いの下、肃々と患者と向き合っています。

視覚障がい者の就労支援事業では、新型コロナウイルスの蔓延や市内での銃撃事件を受け、普段の活動場所である医療マッサージのトレーニングセンターは今も使用できずにいます。学ぶ機会の失われた視覚障がい者に向けて、せめてもと思い立って始めたのがオンラインセミナーです。

開催にあたっては、「このセミナーに意味があるだろうか」「希望者がきちんと参加できるだろうか」といった不安がありました。しかし、いざ始めてみると評判は上々。特に、現役のマッサージ店の店主をお呼びして行った起業セミナーは好評でした。質問も止まず、次回開催予定の問い合わせも多く寄せられるなど、不安が多い中でも手ごたえを感じています。

「与えられた事態に対してどのような態度をとるかは、誰にも奪えない最後の自由である」

『夜と霧』の著者、V.E.フランクルの言葉を噛みしめながら、日々の活動に打ち込んでいます。



## ぽっかりと穴の開いた1年半

2020年3月以降、ミャンマーの教育環境は、再開と停止が繰り返される「まだら模様」の様相を呈しています。

新型コロナに端を発する休校の期間中に起きた2021年2月の政変が、事態をより複雑にしました。この日を境に始まった公務員の抗議活動の一環で、公立学校の教員たちが次々と職務を放棄。加えて、学生や保護者たちも、一斉に不登校運動を始めたのです。休校の目的は、感染拡大防止から全く別のもの、政治闘争へと変化しました。感染状況が落ち着きを見せ始めた2021年6月、政府が学校の再開を呼びかけた際に、それに応じた学校はごくわずかでした。しかも翌7月からは、新型コロナウイルス感染症の急速な拡大によって再び一斉休校に。この休校

措置は、10月末まで続きました。11月に2度目の学校再開が発表されましたが、多くの子どもたちはいまも登校を拒否しており、以前のように街中で制服を着た子どもを見かける機会はありません。

実に1年半もの間、滞ってしまったミャンマーの教育。その理由が政治的なものである以上、この状況はこれからも続く見込みです。ミャンマーの未来を担う子どもたちの多くが、今なお「教育の空白期間」の中に取り残されています。



## 空白のキャンバスに、希望という色を塗る

この事態を、Dream Trainとしてどう迎え撃つべきか。スタッフ一同、頭を悩ませました。子どもたちの学びを止めないために何ができるか。先が見えない中で最善を尽くそうと、さまざまな取り組みを実践しました。

基礎学力の定着と受験対策を兼ねて塾通いは継続し、学習の習慣が薄れないように配慮しました。特に、大学入試に臨む受験生たちには、入試に向けた具体的な戦略を意識して日々を過ごすよう伝え、学習計画の見直しを行いました。日常が不安定な分、自主的な計画は平時よりはるかに重要です。その上で、Dream Trainの新基軸である「STEAM(Science Technology Engineering Art Mathematics)教育」と「語学教育」にも力を入れました。

STEAMの一環として、新たに実施したのは、プログラミング教室です。外部講師をお呼びして、選抜した子どもたち向けにプログラミングの基礎講座を開きました。その一方で、学校で学ぶことのできない状況を案じてくださった日本の中学校の先生のご提案により、オンラインでの理科実験教室も開始。月に1度届く、日本からのありがたい「学びの便り」となっています。



日本語教育も、オンラインの強みを活かし、動画や各種教材を駆使して、飽きさせない工夫をしながら続けています。「将来仕事で使いたい」「なんとなくおもしろそうだから」など、動機は一人一人違いますが、それぞれの思いを糧に学んでいます。子どもたちの人生にぽっかりと開いてしまった学びの空白期間を、どう彩ることができるか。それぞれの未来につながる、自分だけの「希望の色」を塗ってほしい。私たちは、ひたすらにそう願っています。

## 03 ラオス 悩みや迷いを乗り越え、いざ活動再開へ

### 「できない理由」の反対側に見えるもの

ジャパンハートはラオスのウドムサイ病院で、甲状腺疾患治療事業と技術移転活動を行っています。内陸国のラオスにも新型コロナウイルス感染症の影響は先進国や他のASEAN諸国と同様におよび、私たちもこれまでと同じように活動できない状況におかれています。

2020年3月、予定されていた手術活動の2週間ほど前に、私たちは一度、ウドムサイ病院での手術活動を中止する決断を下しました。日本人医療者がラオスで手術を行うために必要なビザの審査は、入国規制も相まって厳しくなり、時間もかかるようになってしまいました。そのうえ、入国後は2週間の隔離を求められます。今までのように、たびたび日本から医療者が現地に出張し、手術活動を行うというのは、現実的な選択肢ではなくなりました。

内陸国のラオスは、海藻に多く含まれ、甲状腺ホルモンに不可欠なヨウ素が不足しがちなために、甲状腺疾患が多い国です。これまでジャパンハートが手掛けてきた症例を振り返っても、手術で摘出した甲状腺腫瘍のいくつかは非常に大きく腫れていました。

甲状腺疾患はすぐに命が危険となる疾患ではありません。それでも、大きく膨れた甲状腺の「こぶ」のために、日常生活に差しさわりが出ます。見た目はもちろんですが、例えば仰向けで寝ると息苦しさを感じることもあるのです。

例えささやかな治療であっても、医療は患者さんやご家族に笑顔と潤いを与え、それが幸せな人生につながると、私たちは信じています。だからこそ、新型コロナウイルス感染症の影響下でもどうにか活動を継続したい。関係者と共に悩みぬいた結果、私たちは1つの回答にたどり着きました。それがインターネットを活用した、日本人医師不在の手術活動の実施です。

人の命や人生に関わる活動に、「とりあえずやってみよう」は通用しません。日本にいる医師にはビデオ通話を通じてリアルタイムで手術の様子を見て監督してもらいますが、万全を期すために、首都ヴィエンチャンの病院の経験豊富なラオス人医師に応援を依頼しました。加えて、まずは比較的リスクの低い患者さんを手術することにしました。

念入りな準備があって2021年6月、本プロジェクトとして初めて、日本人医師がオンラインで立ち会う「遠隔手術指導」は、無事に成功しました。



### 雨の中の再会、明るい未来を目指して

7月になって、手術を受けた患者さんが退院1カ月後の診察を受けに来てくれました。7月のラオスは雨季に入り、お坊さんたちが寺にこもって修行をする「カオパンサー」と呼ばれる季節が始まったばかりです。再会の喜びのあまり思わず抱きついた時、患者さんの髪と服は少し濡れています。

診察のために家族に頼み、いとこが運転するバイクで2時間、雨の山道を走ってきたのだそうです。

遠隔手術の実施に至るまでにはさまざまな迷いや悩みがあった分、患者さんの笑顔を見た時の安堵感は、これまでにないものでした。どんな状況でもベターな方法を探し、できることをする。いつもとは違った活動の中で、ジャパンハートの原点を見た気がしました。ラオス事業は今、成長の真っただ中にあります。引き続きラオス事業を応援していただければ幸いです。



## 04 国際緊急救援事業(iER) ジャパンハートにしか出来ないこと



2021年11月11日、ジャパンハートは沖縄県に、全国初の試みとなる濃厚接触者隔離施設を開設しました。国内での最初の感染拡大から1年半が経過し、受け入れ病床の拡充や医療人員への補助などが充足してきてもなお取り残された課題に対する、ジャパンハートの挑戦です。

「濃厚接触者」とは、PCR検査などで陽性となった方と一定の基準以上の接触があった人のこと。感染している可能性が高いために、陽性者と同等の対策を取らなければなりません。また、潜伏期間を考慮してすでに症状が出ている(感染から日数が経過している)陽性者本人よりも長い観察期間が求められ、「陽性者と最後に接触した日から14日間」の隔離が必要とされています。

クラスター支援現場においては、陽性者の重症化に対応すると同時に、濃厚接触者と陰性者を適切に隔離し、さらなる感染拡大を防ぐことも重要です。しかし、多くの高齢者福祉施設は入居者にとって「生活の場」として設計されているため、病院と違って感染対策上欠かせない「ゾーニング(導線を整理し、感染/非感染エリアを区分すること)」が難しいところになっています。加えて、看護師数に応じて病床数に上限が設定されるコロナ受け入れ病床と異なり、クラスターが発生した施設では限られた数のスタッフで対応できる限界をはるかに超えた人数をケアしなければならない状況になることも少なくありません。

実際に、ジャパンハートが第5波で支援した高齢者福祉施設の一つでは、約50名の入居者のうち半数が陽性となることに加え、通常勤務している3名の看護師のうち2名が感染。実質的に、50名の入所者全員をたった一人の看護師が24時間ケアしなくてはならない状況に陥っていました。

今回開設した施設で私たちが目指すのは、「濃厚接触者自身を感染から守ること」と、「クラスター施設の業務負荷を減らし、通常業務への早期復帰をはかること」です。行政による新型コロナウイルス感染症対策の文脈では、陽性が出ていない、つまり患者として数えられない濃厚接触者を対象とした施設の運営にはなかなか道筋がつきません。行政による補助金も出ない以上、事業会社が手掛けることも容易ではありません。そこで、私たちは「必要性があるにも関わらず、行政にも事業会社にも手が出せない」この領域に着手すべく、多くの個人・法人からの支援を得て、独自施設の開設に踏み切りました。

第6波がどの程度の規模なのか、発生時にこの施設が機能するのか、まだ分からないことばかりです。それでも、日本で誰よりも多くクラスター現場と向き合ってきたジャパンハート・国際緊急救援チームとして、医療の届かないところに医療を届け続けるために試行錯誤を重ねていきます。





## 05 SmileSmilePROJECT

### 家族でやすらぎのひとときを

2020年度から、高級ホテル・旅館の予約サイト「一休.com」を運営する株式会社一休様に、一休ポイントのご寄付をいただいています。このポイントを活用して実施しているのが、小児がんのお子さまとご家族の国内旅行に、一休厳選のホテル・旅館に宿泊し、ご家族の特別な時間、ゆっくり過ごす時間を提供する「一休宿泊ご招待企画」です。国内の一泊旅行にジャパンハートの医師または看護師が付き添い、ご家族をサポートしています。

この企画を開始してから、これまでに6組のお子さまとご家族が旅行を楽しまれました。入院治療が長く、家族一緒にゆっくりと過ごすことが少なくなっていたり、旅行に行けるタイミングがなくて久しぶりの家族旅行だったり、ご招待した家族は、それぞれ家族だけの時間を楽しんでいました。

#### ご家族の声

「娘の笑顔があふれる2日間でとにかく幸せな時間を頂きました。一生の思い出です。家族だけでは体験させられない経験をさせて頂きました。一生で一回のお宿でした。とにかく贅沢で一秒一秒が奇跡のような時間でした。スタッフの方達にも笑顔で優しく接していただいて、盛り上げていただきました。感謝ばかりです。家族でこんなにもゆったり穏やかで贅沢な時間は初めてです。家族全員でまた頑張っていこう、娘の笑顔を守るために再出発だという目に見えない大きなパワーを頂きました。私たちは一人じゃない。いろいろな方の支えがあって今がある。幸せな毎日は娘の笑顔、家族の笑顔から。ほかには何もいらないよという思いに気づくことができた、素晴らしい企画です。」改めて、株式会社一休の皆様に、心より感謝申し上げます。SmileSmilePROJECTはこれからも小児がんと闘うお子さまとご家族のかけがえのない時間をサポートしていきます。



### 「継続する力」を評価 吉岡秀人、第69回菊池寛賞を受賞

文学・映画などをはじめ、さまざまな分野での文化への貢献者が表彰されてきた菊池寛賞（主催・日本文学振興会）。この度、ジャパンハートのファウンダー・最高顧問の吉岡秀人の受賞が決定いたしました。

受賞理由は、「ミャンマー、カンボジア、ラオスなど、まだ医療が行き届いていないアジアの貧困地域で、25年以上にわたり無償の医療支援を行う。コロナ禍の今も、みずから最前線で治療を続ける「継続する力」に」。四半

世紀前に、たった一人で始めた活動は、今や多くの職員やボランティアを集める大きな渦となりました。

新型コロナウイルス感染症の影響下でも、吉岡秀人は自らカンボジアに赴き、手術を手掛けています。吉岡秀人とジャパンハートの「継続する力」は、支援者の皆様が与えてくれる力。今後とも、皆様の期待に応えられるよう、活動を継続してまいります。